



主な内容

- 附属病院副院長就任のご挨拶
- 岩手県高度救命救急センター長就任のご挨拶

Iwate Medical University Hospital News

地域医療連携だより

2022年4月号



岩手医科大学附属病院



内丸メディカルセンター

附属病院副院長就任のご挨拶

医 学 部
形 成 外 科 学 講 座 教 授

副院長 **櫻庭 実**



Iwate Medical University Hospital

2022年4月1日付けで、岩手医科大学附属病院の副院長を拝命いたしました櫻庭実と申します。私は2016年9月本学に着任して以来、形成外科学講座教授として学生や医局員の教育、AMEDや科研費などの研究、地域医療連携を含めた診療に真摯に取り組んで来たつもりです。しかし、今回わずか5年6ヶ月の在任期間でこの様な重責を与えられるとは予想していませんでした。

これまで病院の運営については、診療情報管理室長、パス委員会副委員長として診療記録や説明同意書の整備やクリニカルパスの整備に関わって参りました。これらを通じて病院機能評価に際し多少の貢献が出来たかと思っております。そのほか臨床実習部会で包括同意書の作成に携わり、病院情報システム運営委員会、医薬品購入委員会などにも参画し、病院運営について勉強させて頂きました。この度は財務担当副院長として病院長への助言を行うように、との役割を仰せつかりましたので、附属病院の財務状況をしっかりと把握して、健全な財務体質を確立維持できる様にしていく所存です。

さて岩手県の人口は2021年10月時点で119万6千人であり、過去10年間で約10万人の人口減少を認めています。また65歳以上の高齢者の割合が34.3%と増加する一方で14歳以下の

子供の割合は1990年の19.0%から10.9%と減少、そして世帯数は過去10年間で2万世帯程度の増加を認め、少子高齢化と更なる核家族化への道をひた走っているのが現状と言えます。高齢者の割合が増えると患者数も増加する事は想像に難くありません。しかし高齢化が進むと合併症を有する患者さんも多くなります。その結果多くの医療資源の投入が必要となり、医療経済的にはなかなか難しい状況と言えます。また働き方改革により職員の労働時間は大幅に制限されるため、業務の効率化が急務です。そのためには其々の職員が働きやすい環境を作っていくことが重要です。特定の職種に業務が集中しないようにする、報告だけの会議は縮減する、紙ベースの書類はデジタル化する等々、様々な改革が必要になってきます。

この様な困難な時代にあって、一撃で病院を安定的に運営出来るようになる魔法のような手立ては無いと考えますが、やはり地域連携がひとつのカギとなると思います。就任前から上手くやれるか不安な気持ちで一杯ですが、地域の先生方と連携して職責を全うし、よりよい職場づくりと病院運営に貢献できるよう努力して参りたいと思います。今後のご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

附属病院副院長就任のご挨拶

医学部
産婦人科学講座 教授

副院長 **馬場 長**



Iwate Medical University Hospital

東北6県の医療従事者の皆さま、こんにちは。
岩手医科大学産婦人科の馬場 長（ばばつかさ）と申します。

本年度より附属病院の副院長を拝命いたしました。当院が特定機能病院としての役割を果たし、次回の病院機能評価でも高評価をいただけるよう、小笠原院長の下、院内体制の整備、診療内容の更なる改善のサポート役を担う予定です。昨年度の病院機能評価では土井田教授のプロジェクトチームの一員として、当院のQI（Quality Indicator）測定・公表に取り組みました。連携だよりをお読みになっている医療者の皆さまにとって自院が提供する医療の質を多面的なQIで検証し、改善に努めることは当たり前のことかもしれませんが、恥ずかしながら私にとって初めての経験でした。各QIスコアを他病院と比較して自院の診療内容向上につなげるまでにはまだ道のりはありますが、全国共通のQIを用いて経時的に自院の課題を追跡することの意義に気づくことができ、小さな一歩に手ごたえを感じています。また、日ごろかかわりの薄い部署であってもその活動内容の意味を共有できるのがQIのいいところです。QIを足掛かりとして当院のチームワークを高め、より質の高い医療を提供できるよう、院内各所の働きに目を向けていきたいと考えています。

とはいえ大学病院は地域に活かされてこそ、機能する病院です。当院は基幹病院とは言いつつも、矢巾町に移転してまだ3年目。岩手県内のみならず、東北地方全域で矢巾本院の存在を認知されるには、今まで以上に多くの医療機関や地方自治体、住民の皆さまと連携していく必要があると感じています。私はこれまで総合周産期母子医療センターの働き手として、妊産婦、胎児、新生児医療について一次施設や二次施設と当院の診療業務の共有と分散に腐心する中で、地域から現場の声を多くあげていただく重要性を痛感してきました。ましてや今回は未経験の当院全体の診療改善整備役です。当院が岩手医療圏において求められる役割を果たせるよう、たゆまぬ助言、叱咤、指導をいただきますよう宜しくお願い申し上げます。

本来であれば直接、お願いにあがるべきところをコロナ禍で往来が難しい折から、文面でのご挨拶となることをお許しください。今後とも岩手医科大学附属病院をどうぞ宜しくお願いいたします。

末筆となりますが、皆さまの健康とご多幸をお祈り申し上げます。

2022年春 矢巾にて

附属病院副院長就任のご挨拶

医学部 内科学 講座
糖尿病・代謝・内分泌内科分野 教授

副院長 **石垣 泰**



Iwate Medical University Hospital

2022年度から附属病院副院長を拝命した石垣泰と申します。身に余る重責に心が引き締まる思いでおりますので、これまで以上に皆様からのご指導とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

私は宮城県仙台市の生まれで、柴田郡や岩沼市といった宮城県南で育ちました。1993年に東北大学を卒業し、水沢市立総合水沢病院で3年間の初期研修の後、東北大学の糖尿病代謝科に入局しました。糖尿病、脂質異常、肥満などを中心に診療、研究を行ってきて、2013年9月から本学にお世話になっております。

他県から岩手医科大学に異動して強く印象に残っているのは、関連OBや医師会の先生方にとっても暖かく迎えていただいたことです。今日にいたるまで、人間関係や組織間のストレスをほとんど感じることなく仕事ができているのは非常に恵まれた環境と思います。同時に、岩手県医療関係者の高い人間性と地域医療の遂行を第一とする目的意識の賜物であると感銘を受けております。こうした岩手県の中核病院における責任の一端を担う機会をいただき、地域の先生方とより一層深く関わる立場で仕事ができることを大変幸せに思っております。

糖尿病は、おそらく全ての医療者が関わる一般的な疾患であるとともに、無症状であること

から医療につながらない、あるいはつながりを切ってしまう患者さんが多いことが大きな問題です。私は5年前から岩手県と岩手県医師会と協力して糖尿病性腎症重症化予防プログラムの普及に携わっており、郡市医師会に出向き、あるいはオンラインで先生方や保健師の皆様と協力しながら未受診糖尿病患者や受診中断者を減らすための取り組みを進めてまいりました。こうした活動で培った郡市医師会とのつながりや私自身が感じた地域医療のニーズを、今後のマネジメントに生かしていければと考えています。

岩手医科大学附属病院を取り巻く環境は、病院移転2年半を経て安定してきた一面、新しい課題の出現は引きも切りません。コロナ禍での診療が常態化する中で、地域の皆様の要望を踏まえ、患者さんが安心して医療を受けられる環境を維持していくことが重要だと考えます。これまで以上に病・診連携、病・病連携を密にして岩手県の医療に貢献できればと考えておりますので、気がついたことは何なりとご連絡くださいますようお願い申し上げます。

人 ご挨拶

岩手県高度救命救急センター長就任のご挨拶

医 学 部
救 急・ 災 害 医 学 講 座 教 授

センター長 眞瀬 智彦



Iwate Medical University Hospital

この度 2022 年 4 月 1 日付をもちまして、井上義博教授の後任として、岩手県高度救命救急センター長を拝命いたしました、救急・災害医学講座の眞瀬智彦です。どうぞよろしくお願いたします。

岩手県高度救命救急センターは、1980 年 11 月 1 日岩手県と岩手医科大学が官民共同の救急センターとして開設されました。1996 年に広範囲熱傷・中毒・四肢切断等の特殊疾患を受け入れる当時全国で 7 番目の高度救命救急センターとなり、北海道・東北で最初の認定となりました。2012 年 5 月からはドクターヘリの運航を開始しております。現場で医療を提供することにより早期の初期診断・治療、医療機関の適切な選定、搬送時間の短縮等重症者の救命率向上を目指しております。2019 年 9 月の附属病院移転に伴い、ヘリポートと高度救命救急センターが直結したことで、利便性が向上し、より一層の効果が期待されます。

現在、新型コロナウイルス感染症蔓延に伴い、救急医療の現場はますます疲弊しつつあります。このような中で救急医の育成は急務であり重要なことと考えます。多くの疾患が集まる当施設で多くの学生・研修医をはじめ医療者が学べる環境を整えていきたいと思ひます。

県内唯一の高度救命救急センターとして、2

次救急医療機関を含めた地域との連携、県や消防など行政・他機関との協力は必要不可欠であり、他機関、多職種との「連携」をより強固なものとし、岩手県・北東北の救急医療がより良い体制になるよう尽力して参ります。

基幹災害拠点病院の救急センターとして、県内の災害はもちろんのこと、東日本大震災や北海道胆振東部地震など、実災害での医療救護班の派遣実績を活かし、地震や台風といった自然災害から新型コロナウイルス感染症まで多岐にわたる「災害」から、1 人でも多くの命を救えるよう準備を進めていきたいと思ひます。また、災害急性期から慢性期まで対応できる災害医療人の育成にも引き続き力を入れていきたいと思ひます。

病院移転に伴う 3 次救急外来の一本化により大学病院運営に対して高度救命救急センターの果たす役割はより重要なものとなっております。高度救命救急センター、大学病院および地域の救急医療のさらなる発展のため微力ではありますが尽力したいと考えております。皆様のご支援とご協力をよろしくお願いたします。

岩手医科大学附属病院(矢巾町)は 病院機能評価の認定を受けました



「病院機能評価」は日本医療機能評価機構による評価です

患者さんの命と向き合う病院には、その医療の質を担保するために備えているべき機能があります。

国民の健康と福祉の向上に貢献することを目的とする公益財団法人として 1995 年に設立された日本医療機能評価機構は、病院が備えているべき機能について、中立・公平な専門調査者チームによる「病院機能評価」審査を行い、一定の水準を満たした病院を「認定病院」としています。

約 90 項目の病院機能を専門調査者が審査し評価しています

評価を行う項目は「患者さんの視点に立って良質な医療を提供するために必要な組織体制」や、「実際に医療を提供するプロセス」、「病院全体の管理・運営体制」など、約 90 項目があります。

信頼できる医療を確保することを目的に、専門調査者が病院の機能を評価することで、その病院の課題を明らかにして医療の質改善を支援するものです。

当院は、2020 年 8 月に日本医療機能評価機構による病院機能評価を受審いたしました。一般病院 3 < 3rd G : Ver.2.0 > という特定機能病院用の極めてハードルの高い内容であり、複数の重大な問題を指摘され解決に努力して参りました。2021 年 11 月に最終の審査を受け、2022 年 1 月に無事認定通知が届きました。受審後の講評では、「患者さんおよびそのご家族の方々、患者さんを紹介して頂いた医療機関、さらには救急患者を搬送して頂いている救急隊の方々の声」を病院全体で共有し、着実に改善している点を高く評価されました。これは、職員全員の努力に加え、多くの声を頂いた皆様のおかげです。心から感謝申し上げます。

病院機能評価は受審して、合格することが真の目的ではなく、PDCA サイクルを回して、常に病院の医療安全機能あるいは患者さんの利便性、さらには病院職員の職場環境を改善し続けることと認識しております。

病める患者さんに対し少しでも希望を与え、かつ皆様に「紹介してよかった」と思っていただけのような病院を目指して参りますので、今後とも忌憚のないご意見をよろしくお願い申し上げます。

岩手医科大学附属病院長 小笠原 邦昭